



新潮社

人生について*結婚について
芹沢光治良

人生について・結婚について

昭和四十二年五月二十日印刷
昭和四十二年五月二十五日発行

著者 芹沢光治良

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七十一
電話東京(280)一二二(大代)
振替 東京 八〇八

定価 三二〇円



目次……

第一章 若い人々へ

5

第二章 結婚について

49

第三章 幸福について

97

第四章 私の青春時代

133

人生について・結婚について

第一章

若い人々へ

——断章七編——

独りで考える習慣を

戦後かわった大きなことに、若い人々の解放感がある。少年を見ても、青年を見ても、戦前には想像できなかったように、明るく幸福そうだ。特に、故郷の漁村に帰ると、私はその感を深くする。

その漁村で、私は中学へ進学したということで、村八分のように、あいさつもかえしてもられないで、幾年も暮した。漁村には慣習しきたりがあつて、男の子は小学校を卒えると、漁師になつて、部落の「若い衆」の一員になり、河口でおきる難船の救難作業と、徴兵検査のための予備訓練を、受けることになつていた。

中学校に進学した者は、「若い衆」に加わることが不可能であるから、部落におつても異邦人扱いを受けて、軽視された。私が故郷の人として、部落で受入れられたのは、戦後のことだ。戦前には漁村も貧困であつたが、部落の慣習が住民に生きていたから、向学心に燃える少年も、中学に進学できなくて、みな漁師になつた。

今日では、だれにはばかることなく、希望者は東京の大学へも遊学できるし、部落にとど

まる者も、機械工や運転手や欲する職業に就ける。漁業も規模かわって、遠洋漁業になり、暮しからくになったからでもあるが、また、若い人々が徴兵から解放せられたばかりでなく、部落の慣習か力を失って、村八分の心配もなくなったからだ。おそらく全国の農村や魚村が、大体同様ではなからうか。

この若い人々の明るく幸福そうなのは、戦後の民主主義教育の成果であるようにも言われる。自分で観察し、自分で考え、自分で判断して、自己を表明するというのか、戦後の教育のあり方だそうたか、小学生も、中学生も、高校生も、職業に就いた青年も、実によく自己表現をする。テレビやラジオの討論会などでも、みな正々堂々と意見を述べたてる。

戦前には全く考えられないことで、ほとほと感心するが、しかし、その討論会の活発な発言を、よく注意して聴き、幾度も聞いてみると、必ず一つのことにつく——みな臆することなく自己発表をするが、自分の意見というよりも、世間に信じられている公式的な言葉や文句（パターン）を、ただその場に応じて、応用して反射的に発言しているの、その言葉の重さも内容も考えないばかりか、他人の発言に耳を傾けて、自己の発言を考えなおすことがないので、討論会は活発で楽しいが、なにか虚しいということに、討論会ばかりでなく、若い人々と話していて、同じことによく気がつくが、これはどういうことであらうか。

戦後、若い人々には、あらゆる規範（モラル）が封建主義という名のもとに否定せられて、家庭のしつけまでなくなったが、欧米の民主主義国では、家庭で小さい時から、人間の基本

的規範を、しりをたたいてまで、厳しく子供の心身にたたきこんだ上て、社会へ送り出して、教育を受けさせている。日本の子供は生れて、あまやかされて育てられ、野蛮人とさして変らないままて、社会へ送り出され、教育を受けている。親達は民主主義の世になったからとて、子供を育てる自信をなくして、すべて学校教育に任せている。

しかし、学校で受ける教育は、民主主義教育であつても、人間形成にはたいした力があるものではない。特に、徳育は授けない。考える力を授けてくれればいいのだが、入学試験制度のもとで、ほんとうに考える訓練のできる勉強がなされるてあろうか。試験に答えるに便利な断続的な知識か、パターンとしてただ与えられているのではなからうか。討論会で活発に発言する学生を見、よく物をわりきつてゐる青年に会うたひに、そう疑うのだから――

一体、若い人々は生きるモラル（規範）をどうして得るのであろうか。かつては地域社会に、慣行があつて、そのなから若い人々は生きる規範を得た。地方のお母さんたちは、息子をしつけられないで、徴兵検査前の準備の青年団や兵営に、息子の人間づくりを委ねて、安心していた。今日では、その兵役もなく、地域社会の慣行も力がなくて、日本の若い人々は、世界で最も自由をゆるされて、幸福そのもののように見える。

しかし、その代りに、生きる規範は自分で発見しなければならぬ。言葉を換えれば、生れて両親からしつけを受けないで、野放図に社会へ放り出された哀れな人々だとも言える。その社会も、金か万能で、若い人々には夢も希望もない荒野のようで、ここに規範があると

は考えられない。

その規範は、学校でも授けてはくれない。自分で独り考えてつくるより他にないのだが、独り考えるということが、今日ほど難しいことはない。考えないで、すべてが足りるように、与えられるからだ。すばらしく立派な考え方が、パターンになって氾濫はんらんしているから、それを意味も考えないで、手つかず採用して、自己表現すれば、立派な若者として、安心して通用するが、次の瞬間に、同じ若者がわけもなく弟を殺し、赤ン坊を浴そうに沈めて殺したりするかも知れない。それどころか、今日は民主主義に必要なパターンが氾濫しているが、何かの都合で、全く異なった思想や制度に必要なパターンに徐々にかえられるようなことがあっても、独り考える習慣をなくしているために、気がつかないで、そのパターンを自分のものにして、意識しないで違った思想の人間になっていることが起りはしないだろうか。現に、新興宗教に走る若い人々にその傾向が現われているように思われるが、私は明るく幸福そうな若い世代について、それを最も心配する。

独りで考える——そのことが日本の民主主義教育で、実行されていないのではなからうか。そのことが、また、日常生活で最もできにくい時代ではあるが、それがなければ、今の幸福も、ただ動物的なしあわせにすぎなくなるのではなからうか。独りで考える——思索する習慣を若い人々に身につけてもらいたい。

友情を忘れた寂しい青春

受験期、入学期がすんで、学生諸君もいちおう落ち着いたのではなからうか。

東京の電車などで、まだ出身地の地方の色をとどめた新大学生を多く見受けるが、私はその人々の会話をいつも注意深くきくことにしている。そして、現代の学生生活が、東京でも地方でも、いかに味気ないものか、その人々の雑談からも感じられるが、入学試験について、本気に考うべき時ではなからうか。

きょうも東京の有名な三校の高校の三年生が数人訪ねて来て、高校生活について話してくれたが、高校生活が、大学の入学試験の準備のために、たがいに競争しあって、友情さえ持てないと、寂しそうに語ったのには、胸をつかれた。私は思わず

「え、友情を持ってないって、友達がないの」と、問いかえした。

「そうです。同級生はあるが心を語る友達はないのです」と一人が答えたが、他の学生もうなずいていた。

私は信じられなくて

「高校生が、友達がないなんて……君たちの時代には、恋愛論よりも友情論に興味や関心が強いはずだと思うがなあ——」と驚いて言った。

「ほんとうです。友情を持てるほど、心に余裕がないんです」と、他の一人が答えると、また他の一人が

「友情論ですか、美しい言葉ですね。僕たちはそんな言葉も忘れていました」と、寂しそうな表情をした。

高校生が友達がないというのは、信じられないようなことであるが、真実であるらしく、私はその学生諸君に同情したが、自分たちの高校時代をかえりみて、これでいいのだろうか、と、深い疑問が、いつまでも残った。その高校生諸君が誇張しているのではないことは、その真剣な表情と寂しそうなまなざしでも、よくわかった。

しかし若い日に、友情のないような人生が、この人々に幸福を保証するであろうか。友情も持てないような青春をすごした人々で支えられるような社会や国家が、どんなものになるであろうか。私は何か寒々しい気持がした。

進学と入学試験とが、これほどまでに高校生活をゆがめているとは、なぜかわしいことだが、また考えさせられることだ。

今日の高校生活の特長の一つに、クラブ活動がある。クラブ活動がさかんだとも聞いている。クラブ活動によって、一つの目的のために協力することは、自己犠牲や自己制御を強い

られて、苦しいこともあるが、みんなが共同して同じ目的に精進することは、喜びも多くて、たしかに人間をつくりあげることもなる。一人ではできないことを、仲間と協力することで完成することは高校生にとっては、はじめて隣人を意識し、ほんとうの意味で、愛を知ることであろう。それゆえ、苦しいことが多くても、クラブ活動がたのしく喜びがあつて、みな熱心になるのであらう——と、私は考えていた。そして、クラブ活動のなかに、戦後の高校生の友情が育まれたものと考えていた。

しかし、実際は、クラブ活動をしていては、進学できないという考え方が、高校生を支配している。進学志望の学生は、入学試験ということが、頭にのしかかつていて、常に試験勉強をしなければならないと、焦慮している。それゆえ、強制的にクラブ活動をさせられても、熱心になれないから、クラブ活動の成果もあがらない。ましてクラブ活動のなかで、友情なども育たない——というのだ。

試験勉強は孤独にこもって、こつこつ勉強することである。しかも、入学試験は及落試験ではなくて、競争試験であるから、いつも相手を意識する。高校の同級生が進学の試験には、競争相手になる。手をつなぐ相手ではなくて、つきおとす相手であるから、友情がわかないのも当然だ。そのうえ、その勉強が、ただ入学試験のための勉強であるから、味気なくて、人生にとって意義のあることも考えられない。しかし、勉強しなければ人生の落伍者になる——そこで、がりがりもうじやのような勉強をする。

高校生や大学生に、小学校や中学校の同窓会に出るか質問してみると、そのゆがめられた人間性に、すぐ気がつく。とくに、その小学校や中学校が、私立ではなくて、公立のものの場合にはつきりしている。高校生や大学生は、母校である小学校や中学校の同窓会には出ない、みな答える。なぜ出ないかきいてみると、出ても面白くないからと、たいてい答える。同窓会に出る時間があれば、映画に行くと、気軽に答える者もある。それなら、進学できなかった小学校や中学校の同級生とふだん話すことがあるか、きいてみると、みな話すことはないと答える。

この答はなにも特別なものではなくて、当然のように受けとられるが、しかし、考えなければならぬ事がこの答のなかにある。

小学校でともに六年をすごした仲間や中学校で三年すごした仲間が、同じ高校や大学に進学しているのではない。いや、高校や大学に進学できた者は、少数のめぐまれた者で、多くの人々は進学できないのが、日本の現状である。めぐまれて高校や大学に学ぶ者が、同窓会にもすすんで出席しないし、ふだん、昔の仲間と話もしないというのは、地域的にも、幼い日の友と手をつなごうとする意思のないことをあらわしている。小学校時代の同級生——幼な友達にあつて話しあったり、おたがいに励ましあうという熱情も、興味も、関心もないということである。いいかえれば、この人々の心には、幼い日の友情も、思い出もないという事ではなからうか。これでは、人間としてあまりに寂しいことではなからうか。